

近世哲学研究

第 10 号

十年の歩みを顧みて	—— 菌田 坦	1
* * *		
デカルトと自覚の問題 ——コギトの弁証法性——	—— 実川 敏夫	3
アレゴリーの復権をめぐって ——ガダマーとポール・ド・マン——	—— 高田 珠樹	22
行為の規範としての礼節 (decorum) の意義 ——クリスチャン・トマーゼウスにおける法・道徳・礼節の区別——	—— 福田喜一郎	44
格率とその「枠組み」 ——カントの道徳判断論の新しい理解を目指して——	—— 西川小百合	64
* * *		
《書評》		
福居 純著 『デカルト研究』	—— 浅沼 光樹	80

2003

Epistola XVI

京大・西洋近世哲学史懇話会

編集後記

本誌は本号で十号という節目を迎えた。会員の方々のご支援、寄稿者のご研鑽、さらに歴代編集委員の無私の奉仕を思い起こすと、感謝の念あらたなるものがある。十年を振り返れば、本誌を取り巻く状況が大きく変わった。これを自覚せざるを得ない。大学における哲学が、そして大学そのものが、このような状況を体験するとは予想できなかったことである。そして、変動はまだこれからも当分は続くことを覚悟しなければならない。

ただし、いつの世にも変えることがないのは、ものごとが鮮やかに解明された時の、あの昂揚であり爽やかさである。本誌の拠り所とすべきものはここにありと思う。これを信じて、熟年の奮起と新進の登場を期待するや切である。幸い、今号では会員お二人の論文のほかに、実川敏夫先生および高田珠樹先生のご寄稿をいただくことができた。ご多用のなか快く椽大の筆を振るってくださった両先生に篤くお礼申し上げる次第である。また、蘭田坦先生からは発刊以来の歳月を回顧しつつ、あらたなチクルスの開始への餞の意を寓したお言葉をいただいたことを喜びたい。

近頃少しおかしい、と、いつ言っても安全なものも三つあるのだという。気候と、言葉と、若者だそうである。哲学者はこれをどう活用するのか、その実例を見つけた。昭和一二年五月の『文藝春秋』に、三木清が「学生の知能低下に就いて」というタイトルの文章を書いている。三木によれば、「満州事変を境として学生がかなり明瞭にふたつの層に分かれる」ことが観察される。「知能低下」したのは「事変後の学生」である。「事変後において著しく

積極化した」国家の教育政策の結果生じたのが、「知能低下」学生なのである。「知能低下」とはどういうことなのだろうか。その前に、もう少し三木の論調を聴こう。

「私の知人の某教授は、今日の学校は一階級ずつ低下し、高等学校が中学になり、大学が高等学校になった、と言っている。かような低下は直接にはいわゆる『知能』に関することではないであらう。低下したのは主として学生の『知能』である。『昔の高等学校の生徒は青年らしい好奇心と、懐疑心、そして理想主義的情熱をもち、そのためにあらゆる書物をむさぼり読んだ。』「然るに今日の高等学校の生徒においては、これらは『学校の教育方針そのものによって圧殺されている』。国家の教育政策たる『思想善導の結果が学生の知能の低下となつて現われても不思議はない』。むしろ、『ある大学生の話によると、事変後の高等学校生はほとんど何らの社会的関心も持たずにただ学校を卒業しさえすれば好いというような気持ちで大学へ入ってくる。』

こう畳み掛けた上で、「知能低下」とは、「事変後の学生」に見られる「批判的精神の欠乏」、「自主性の喪失」、「權威主義」であると具体化し、「根本的には研究の自由の存しないところに知能の向上は望めないのである」という結論が導かれるのである。

三木が引用して語る言葉には、世代が交代することに同じような若者批判が懲りずに繰り返されるものだ、と驚かざるをえない。が、むしろそのような精神の惰性を逆手に取って、自分の論点へと誘導する三木の巧みな戦略に注目したい。区々たる事象とその批判そのものではなく、それをどのように方向付けるか、ここにこそ哲学者らしい現実との対処策があることをわれわれに教えるのではないだろうか。(F)

『近世哲学研究』（既刊目次）

第一号（二九九四）

祝辞 酒井 修
ハイデッガーにおいて哲学を 田中 敦
—— 現存在の現象学的存在論考究 ——
カントと初期フイヒテとの接点

北岡 武司
義務論としてのカント倫理学 蔵田 伸雄
—— 功利主義との対比 ——
対象と反省 山脇 雅夫
—— ヘーゲルの矛盾概念の理解のために ——

第二号（二九九五）
カント哲学における「経験」概念について 福谷 茂
—— 「世界」概念導入のための
端緒として ——

ヘーゲルのコルポラツイオン論 早瀬 明

—— 市民社会の団体主義的変革に向けた
ヘーゲルの試み ——
工学はどういうタイプの学問か

齊藤 了文
信仰の情熱とその逆説 田中 一馬
—— キェルケゴール『おそれとおののき』
におけるアブラハム解釈をめぐって ——
ハイデッガーのヘーゲル解釈 橋本 武志
—— 意識の二義性と意識の転換 ——

第三号（二九九六）

『全知識学の基礎』の到達点 子野日俊夫
読書人世界から学者共和国制度へ 福田喜一郎
—— 理性を制度化しようとした
カントの試み ——
デカルトにおける愛の区別について

武藤 整司
未済の人倫 石田あゆみ
—— 『精神の現象学』主一奴論の一解釈 ——

ガダマーのデイルタイ批判 折橋 康雄

—— 『真理と方法』を中心に ——

第四号（二九九七）

一本の綱 (Seil) としての人間 吉川 康夫
—— ニヒリズム状況下に於ける
人間と社会の問題 ——
デカルトの懐疑について 安藤 正人
—— 『省察』の「反論と答弁」を
資料として ——
市民と国家の媒介 小川 清次
—— 「国民」形成の二側面 ——

『存在と時間』に於ける可能性概念の
多義性について 橋本 武志
自然主義的存在論の隘路 次田 憲和
—— フッサールの「領域的存在論」における
超越論的構成の「自己関係的構造」 ——
第五号（二九九八）

「常に誤る」と「時々誤る」 武藤 整司
—— デカルト的行論の一考察 ——

デイルタイに於ける客観的精神の概念
について

ハイデガーの他者論

折橋 康雄
安部 浩

第六号 (一九九九)

デカルトにおける『真理』と『存在』

倉田 隆

——明晰かつ判明に知得されるもの——

ヘーゲルの根拠論

山脇 雅夫

——知と存在との相即——

「第五省察」の隠された論理 次田 憲和

——フッサール『デカルト的省察』における

「他者構成論」理解のための一視座——

シエリング哲学の出発点 浅沼 光樹

——人間の理性の起源と歴史の構成——

第七号 (二〇〇〇)

—— 菌田 坦教授 退官記念号 ——

菌田 坦教授 略歴・業績一覧

《講演》

近世哲学における神の問題 菌田 坦

近世哲学とはなににか 福谷 茂

——新しい哲学史像のために——

人間の輪郭 武藤 整司

——その曖昧さを擁護するために——

知の自己吟味 山脇 雅夫

——『精神の現象学』緒論における

知と即自の区別について——

ハイデッガーの良心論再考 橋本 武志

——可能性概念を手がかりに——

生と音楽 折橋 康雄

——デイルタイに於ける

生と音楽の時間性の問題をめぐって——

第八号 (二〇〇一)

自由の軌跡 北岡 武司

——批判哲学における

自由の可能性の意味——

認識か解釈か 福谷 茂

——新しい哲学史像のために(二)——

G・ハーマン相対主義説の論理

歴史的理性の生成 田中 一馬
浅沼 光樹

——シエリング『悪の起源』における
神話解釈の意義——

《書評》

北岡武司著『カントと形而上学——物自体と

自由をめぐって』 橋本 武志

N・ケンブ・スミス著(山本冬樹訳)『カン

ト』純粋理性批判』註解』 長田 蔵人

第九号 (二〇〇二)

『存在と時間』と哲学の方法(形式的挙示
再考) 田中 敦

フッサールにおける他者経験の構造と発生

——ウイトゲンシュタインの「規則に従う」論

の若干の考察 榎原 哲也

復古のもとでの立憲主義 子野日俊夫

——ヘーゲル法哲学講義(ベルリン

一八一九/二〇年)の二つの講義録——

《書評》

ヤーコプ・ペーメ著(菌田 坦訳)『アウロー

ラー』明け初める東天の紅』 福谷 茂

編集委員会

代表
委員

福谷	武藤	山脇	長田	佐藤
茂	整司	雅夫	藏人	慶太

執筆者紹介

藪田 坦 京都大学名誉教授・龍谷大学教授
実川 敏夫 東京都立大学教授
高田 珠樹 大阪外国語大学教授
福田喜一郎 鎌倉女子大学教授
西川小百合 九州大学大学院博士課程
浅沼 光樹 龍谷大学非常勤講師

(執筆順)

近世哲学研究 第10号

2004年3月31日 発行

編集・発行 京大・西洋近世哲学史懇話会
編集代表 福谷 茂
〒606-8501 京都市左京区吉田本町
京都大学文学部
西洋近世哲学史研究室
<http://www.bun.kyoto-u.ac.jp/modephil/>
TEL (075) 753-2444
振替 01080-3-31430

印刷所 協和印刷株式会社
〒615-0052 京都市右京区西院清水町13
TEL (075) 312-4010(代)

定価 1200円(本体 1143円)

STUDIES in MODERN PHILOSOPHY

No. 10

Tan SONODA : Ten Years of *Studies in Modern Philosophy*: In Retrospect 1

* * *

《Articles》

Toshio JITSUKAWA : Descartes et le problème de la prise de conscience 3
— La dialecticité du *cogito* —

Tamaki TAKADA : Zur Rehabilitierung der Allegorie 22
— Gadamer und Paul de Man —

Kiichiro FUKUDA : Decorum als Handlungsregel 44
— Christian Thomasius' Unterscheidung
zwischen *justum*, *honestum* und *decorum* —

Sayuri NISHIKAWA : Maxims and their Framework 64
— Towards a New Understanding of
Kant's Theory of Moral Judgment —

* * *

《Review》

Kôki ASANUMA : Atsushi FUKUI, *Études cartésiennes* [en japonais] 80

2003

Epistola XVI

Published by
The Society for The History of
Modern Philosophy
at Kyoto University